巻　頭　言

セイタカアワダチソウの今昔

公益財団法人日本植物調節剤研究協会　評議員
株式会社エス・ディー・エス バイオテック　取締役技術開発部長
吉永　小太郎

今年は新型コロナウイルスの感染拡大を受けて，例年と異なり，ゴールデンウィークやお盆休みなどに帰省出来なかった方が沢山おられるであろう。私もその一人で，なかなか実家のある熊本に出向くことが出来なかったが，9月にようやく東京から他県への移動も認められたこともあり，10月後半に帰省し，墓参りなどの例年のお盆の行事をようやく済ませることが出来た。

私の実家は熊本県熊本市東区，現在は熊本市も政令指定都市となり何となく都会っぽくも感じるが，私が幼少の頃までの住所表記は熊本市秋津町沼山津（ぬやまづ）であり，町名で解るように限りなく田舎に近い熊本市民であった。当時，平屋の家の玄関を出ると眼前に阿蘇山が見え，噴煙や冬の雪景色なども望むことが出来た。そんな田舎で過ごした50年ほど前の幼少時代，学校活動以外での時間は外で遊ぶことが殆どであった。公園や空き地での草野球，缶蹴り，コマ回し，ビー玉や河や湖での水遊びなど，毎日暗くなるまで外で過ごした。特に秋から冬にかけては，毎年のように広い空き地の中に秘密基地を作って遊んでいた。当時，家の周りには空き地が沢山あったが，センダンの木が中央に生えていてセイタカアワダチソウが群生している空き地が拠点であった。先ずはセイタカアワダチソウを踏み倒してセンダンの木までの通路を作り，センダンの枝に折ったセイタカアワダチソウを組み上げ屋根とし，木の周りに同じように壁を立てることで秘密基地としていた。その際，セイタカアワダチソウは秋になり枯れてくるとポキポキと簡単に折れやすくなることから，我々にとっては秘密基地を作るに非常に有用な資材であり遊び道具でもあった。

幼少の頃は大切な資材であり遊び道具であったセイタカアワダチソウだが，社会人となり，25年程前に当協会にお世話になる仕事をするようになってからは，除草対象の雑草へと変わった。当時，鉄道や遊休地対象の除草剤の開発・営業を担当していたが，特にセイタカアワダチソウは根絶すべき最も重要な雑草であった。幸い弊社所有の緑地管理向け除草剤（カルブチレート）が同雑草に効果を有することもあって，当協会で多くの試験を実施し，幾つかの緑地管理向け除草剤を開発することが出来た。

ところで，セイタカアワダチソウはキク科の多年草，北アメリカ原産の帰化植物で明治時代に園芸目的で持ち込まれたとされている。この雑草の大きな特長は“アレロパシー”を有することである。“アレロパシー”とは“他感作用”と訳され，植物が生産するある物質（アレロパシー物質）が，他の植物もしくは同種植物に影響を及ぼす作用を言う。先に述べたようにセイタカアワダチソウが群生するのは，根から周囲の植物を抑制するアレロパシー物質（cis-DME/ シス - デヒドロマトリカリエステル）を出し，周辺に生えている植物の生育を阻害している為である。私が幼少期だった昭和40年代は，まさにセイタカアワダチソウの隆盛期で，背丈2mくらいのものが群生していたように記憶している。しかし調べてみると，その後は自らのアレロパシー効果によって種子の発芽率が抑えられ，過度な繁殖も少なくなり，背丈もそれほど高くないものが多くなったようである。

そう思って墓参りに行く道中，あらためていろいろな場所のセイタカアワダチソウを見てみると，確かに以前のように背丈も大きくないし，群生しているところも少ない。仮に群生していてもススキと混生しているところが多く，過去に見た一面に黄色の花穂が広がる風景に出会うことはなかった。幼少期に見ていた空き地のセイタカアワダチソウは凛々しく壮大なイメージがあったが，今では哀愁さえ感じる植物になったように感じた。

私にとってセイタカアワダチソウは，仕事の上ではこれからも根絶対象の雑草であることは間違いないが，一方で幼少期に思いを寄せることが出来る，ある意味，愛しき植物と実感したこの度の帰省であった。